赤ちゃんの四季（47）　平成20年秋

Win-Winのこころ

いろいろと話題の大きかった北京五輪もあっという間に１７日間が過ぎ、無事フィナーレを迎えた。いろんな感動の場面がテレビに映し出されていたが、私にとって最も感動的であったのは最終日の男子マラソンでのほんの一瞬のシーンである。レースは猛暑の中にもかかわらず、序盤から世界記録に迫るハイペースの展開となり、アフリカ勢を中心に先頭集団を形成し、３０キロ手前で先頭集団が３人に絞られ、死闘が繰り広げられていた。

３５キロの給水地点で、ワンジル（ケニア）が自分のボトルを取り損なったのをみたケベデ（エチオピア）が自分のドリンクをワンジルに差出し、貰ったワンジルは飲み終えると軽く手を挙げてケベデに礼を示した一瞬が映し出された。その後すぐにワンジルがスパートし、一気に後続を引き離し、２時間０６分３２秒をマークし、五輪新記録で優勝した。ケベデも銅メダルに輝いた。

　過酷なレースの中で、水分補給なくしては走り続けることができない。激しいレースの中で、直接のライバルに対するケベデの気遣いには思わず感涙した。あの時にワンジルが水分補給しなかったら、果たしてスパートができていたであろうか。最後まで走り続けられていたであろうかと思ったりする。

　グローバル化した現代社会は、競争社会化し、格差社会を生み出している。経営学の大家であるフレデリック・F. ライクヘルドは自著「ロイヤルティ戦略論」の中で、「Win-Win」が企業経営成功の秘訣であると述べている。「目先の利害に捉われない、隣人への思いやり」の大切さを幼少期から育てたいものである。金メダルに狂奔する大人たちにはできない、子どもたちへのいい手本をケベデは示してくれた。